

複式学級 先生は「ユニボ」



複式学級の自習にユニボを使う青河小の1、2年生の授業

AI搭載ロボ 中国電出資ベンチャー開発

三次で試行「過疎地の役に」

人工知能(AI)を搭載したロボットを使って複式学級の授業をサポートする試行に、三次市の青河小が取り組んでいる。中国電力(広島市中区)が出資するベンチャー企業ユニロボット(東京)が開発したロボットを活用。デジタル技術を生かした新しいビジネスの可能性を探る広島県の「ひろしまサードボックス」事業の一環で、3学期の算数の授業に活用した。

(石川昌義)

「どうだった。合ってた？間違ってた？」。机に置いた高さ約30センチのロボット「uniBo(ユニボ)」が、首を振りながら児童に呼び掛ける。QRコード付きの問題集を使い、解き方や基礎的な思考法を解説。IDカードで個人を認識し、理解度に応じた学習をサポートする。

2017年発売のユニボは、学習塾や企業の受け付けなどで利用実績がある。2学年を同時に受け持ち、教師が対応できない学年は自習する複式学級の授業に活用するアイデアを、ユニボの教育分野での活用に取り組みむベンチャー企業ソリユーションゲート(東京)が発案。広島県を通じて試行の対象校を探した。

全校児童16人で完全複式学級の青河小。児童各2人の1、2年の授業では復習をユニボが担当。「全問正解、おめでとう」「しっかりと理解できたみたいだね」。

ユニボからの声掛けに2年山本春花さん(8)は「説明も分かりやすい。『頑張れ』と言われるとうれしい」と笑顔だった。

児童1人に1台配布したタブレット端末を使った家庭学習との連動もできるといふ。「1つの学年をユニボに任せると、集中して児童に向き合える」と、2年担任の松本千恵子教師。ソリユーションゲートの鈴木博文社長は「ユニボを介して子ども同士の学び合いもできる。少子化、過疎化が進む地域の役に立ちたい」と意気込む。

動画は中国新聞デジタルで

